

私たちが考え、行動できること

横浜・神奈川子宮頸がん予防プロジェクト公開シンポジウム

横浜・神奈川子宮頸がん予防プロジェクトの一環で、2月9日開内ホール・小ホールで「公開シンポジウム〜みんなを守る みらいのあなた〜」が開催された。子宮頸がん啓発活動に取り組む「女子大生リボンムーブメント」も参加し、産婦人科医による講演や参加者の意見交換などが行われた。同シンポジウムに対して当協会も後援。

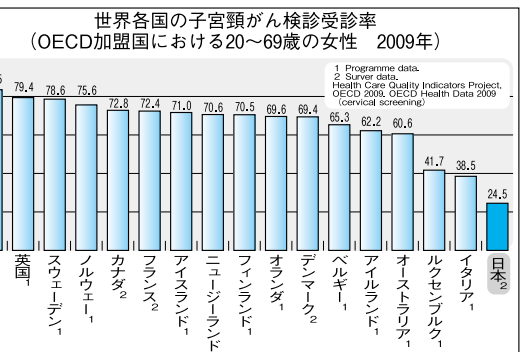
早期発見をすれば必ず助かる命
診がいかにも重要であるかを裏付ける内容だ。



上坊敏子医師

シンポジウムは、神奈川県立がんセンター婦人科医長の加藤久盛医師の挨拶で幕を開けた。加藤医師は子宮頸がん検診無料クーポンを使用した受診者から早期の子宮頸がんを発見。治療後に妊娠、出産をしている例もあげ「今日は子宮頸がんへの意識が高い方が集まっているが、関心の薄い人たちに広めてほしい」と呼びかけた。

続いて社会保険相模野病院婦人科腫瘍センター長を務める、上坊敏子医師の講演が始まる。子宮頸がんについての特徴をいくつか挙げ、解説していく。検査



は感染が持続し、HPVに感染した女性の約0.1%が5年以上かけて子宮頸がんになる。進行すると不正出血や腹痛、腰痛などの症状が起るが「初期は自覚症状がなく、検査で初めて気づく病気なので、検査を受けるべき」と声を大にした。

初期の0期、1A期で発見された場合、完治の目安となる5年生存率は100%。治療

は円錐切除が主で、治療後の妊娠、出産も可能だ。逆に進行すると命に関わることもなる。

上坊医師は、このような現状にもかかわらず、日本の検診受診率が低迷していることを問題視する。アメリカやイギリスの受診率が80%を超えるのに日本は24.5%に過ぎない。20歳代ではわずか5.6%と非常に低い。この現状を改善するため

子宮頸がんの宿命を使命に変えて
上坊医師をはじめとした医師の立場からの講演に続いて壇上に立ったのは、子宮頸がんを体験し、検診啓発活動も行っているシンガーソングライターの松田陽子さん。幼い頃からの人を振り返り、明ら語った。

松田さんは子どもの頃、大変な家庭環境で育ち、学校でもいじめに遭い、うつ状態だったという。20歳の時にはブロードウェイのホテルで歌うほどの歌手となるが、「心からたたかいた家庭」だった。結婚し出産後、軽い気持ちで検診を受けてみると子宮頸がんが発覚。すぐに子宮を全摘出した。自覚症状がなかった。自覚症状がなかった。自覚症状がなかった。

のが子宮頸がんなのに、子宮頸がんが苦しむのはもったいない。ぜひ検診とワクチン接種を受けてください」と訴えた。

受診率を上げるためには個人の意識とともに、行政や民間が検診受診を促すことも不可欠だ。

4時間半の手術を受け、血に染まり、体にはたくさん管。痛みでうなされた。「自分でトイレも行けず、無理に立ち上がったら倒れてしまい、情けなく。みなさんにはこんな目にあってほしくない！」と力がこもる。再発の不安などから、うつ病になり、離婚がし、私なんていない方がいいと思う日々。それでも子どもの声や周りの人に支えられ、病気を克服した松田さんの今がある。

「みなさん、太陽のようなお母さんになって。私は、宿命を使命に変えて、亡くなる直前まで自分の病気を語って、検診に行ってもらいたい。みなさんも自分の検診だけで終わらせず、大切な人に伝えてください。ピカピカかな人生を、健康とともに生きてください」と力強いメッセージを投げかけた。

「知っている」から「受診する」に

「横浜、神奈川から、ワクチン摂取率と子宮頸がん検診の受診率を上げ、変えていきたいと思います」と声を上げるのは、横浜市立大学附属病院化学療法センター長



厚生労働科学研究費補助金がん臨床研究事業や啓発活動を行っている宮城悦子医師

の宮城悦子医師。平成23年度厚生労働科学研究費補助金がん臨床研究事業により発足した横浜・神奈川子宮頸がん予防プロジェクトリーダーとして、マーケティング手法も活用し日々研究している。子宮頸がんによる20代の死亡数が増えていることに着目し、2010年と2011年に女子大学生1、500人以上を対象に行ったアンケートの調査結果を紹介した。ワクチンの存在やウイルス

り、中学、高校生を対象に公費でのワクチン接種も始まり、高校3年生の接種率は8割を超えている。これは医療先進国のオーストラリアと並ぶくらい、世界的にも高い数値だ。昨年、自費でワクチン接種をした大学1年生は13.5%と増えている。「ここから改革を起こさなくては」と、さらに地域別の接種率の差なども検証しているところだ。情報や知識を共有し、伝えたいことで子宮頸がんが変わっていくと語った。



松田陽子さんは、世界の難民支援や児童虐待防止活動にも取り組む

若い力とアイデアでムーブメントを起こす

この日は「みんなが考える予防行動」をテーマに、大学生5人によるディスカッションも行われた。大学生からの提案を元に客席や演者の医師からも意見が飛び交った。その一部を紹介する。

新井涼子さん（女子大生リボンムーブメント代表） 検診を受けてもらうためにはどうしたらいいでしょうか？

下向依梨さん 私は姉に誘われたので、無料クーポン2枚組なんだろうというのでは。草刈良允さん ソーシャルマーケティングの手法を生かして、誰かが検診に行くと言いつつ、それに賛同して一緒に行動するなど、楽しいことと連動させるのもいいですね。

佐藤瑛理さん フェイスブック上で検診の予約をする、高級ディナーのクーポンがもらえるなどの連携や特典も必要では。

新井 実は、横浜・神奈川子宮頸がん予防プロジェクトのサポートページにアクセスして検診を受けると、お得なクーポンがもらえるシステムなんです。

下向 何かの「ついで」にできれば。エステと一緒にやれ、外もキレイになれるなど。上坊医師 エステも併設して開業した医院もできてきていますよ。

井上裕美さん 男性と一緒に行動を起こせることはないでしょうか？

佐藤 彼氏から、検診クーポンのプレゼントができる仕組みがあれば押しになります。

新井 広げていく人への特典もいいですね。会場の男性客 検診に誘うのに抵抗がある人はこのようなイベントに誘うのならできると思っています。（会場から拍手）

井上 そんな話を身近な人とできる関係にしたい。会場の女性客 今日、聞いたことをまず子どもにも伝えたい。まず家族から広めていければ。新井 今日の見聞を共有し、検診があたり前になるように今後も活動していきます。



このように検診を受けるだけではなく、広めていくための行動についても意見が交わされた。自分分はもとより、大切な人を誘う、促す行動を起こしていくべきだろう。（関連記事2面）